

## 涙を一杯ためて最後の対面

万感胸に迫ったか…

島崎藤村氏の談

十一日の午後私が病床を見舞うと花袋君は大変喜び『もう自分も死を覚悟しなければなるまい。時の問題だ』というので田山君も生とか死とかいうことに就いては随分考えた人だから『この世を辞して行くとなるとどんな気がするかね』と問うと『何しろ人が死に直面した場合にはだれも知らない暗い所へ行くのだから中々単純な気持ちのものじゃない』とっていました、田山

は人の好意を喜ぶ美しい所があり、私が花袋集に寄せた一文のことを口にし『大変自分でもうれしかった』と礼をいましてね…：何しろ長い青年時代からの知合いで急に半生のことを思いだしたか万感胸に迫ったか私の顔をジッと見て目に一杯涙をためましてね、看護婦にふいてもらいました、しかし中々元気で、ともすれば舌がもつれる中を色々と話すから『少し休み給え』と止めたほどでした。

医者が来たので私が立とうとすると『もう一度顔を見せてくれ。注射すると眠くなるかも知れぬ、その前にお別れを告げよう』といいますが、その時床の間の七言絶句が目についたので『よく出来たね』とほめると『ごく最近書いたのだ、自分でもこの字はよく書けたと思う、君にあげよう』と私にくれました。

雨五六条春尚浅 鶯三四囀遶庭樹  
点々隣祠羨花早 雖有園梅我豈遲 録

これが絶筆になろうとは思わなかった、柳田国男君が贈った紫陽花の鉢のこと、顔真卿の石刷のことなど語り『苦しいか』と聞くと『苦しい』とっていました、つくづく見ると毛深い手も痩せ頭も銀髪となつているが六十年生涯を働き続けて来たことを物語り特に白く長い眉毛が二本目につきました、しっかりした鼻、雄健な感じのする額―田山の所を辞してから目に浮かんだことは友人ではあるがいかにも大きな人がこの世を辞して行くという感じが致しました。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所もある。

※出典 出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より(記事は「東京朝日新聞」)

※文中の漢詩の大意

雨が降り出したがまだ春は浅く、鶯は庭をめぐり三、四回さえずる。隣のお宮では早くも花が咲いて羨ましい。私の庭にも梅はあるがまだ開花が遅れている。

〈参考文献〉

田山花袋記念文学館研究紀要 第二十六号  
中島清「花袋の漢詩⑤―漢詩に見る晩年の花袋―」